

子どもの深い学びをつくる学校図書館の活用 —「自ら学ぶ子ども」を育てる実践の提案—

学校構想サブプログラム

藤永 さつき

【指導教員】 宇佐見 香代 浅海 純一 栗原 孝子

【キーワード】 学校図書館 発展学習 深い学び パスファインダー

1. 研究目的

本研究は、従来の教科等の学習を深めるために、情報探索や情報活用の基礎を学習することが必要であることを提唱し、情報活用の基礎を学び、教科等の学習を発展させるための実践の提案を行う研究である。学習に活用できる多くの資料を備えた学校教育に欠かせない設備である学校図書館が教科等の学習に活用されていないのではないかと考えられる現状を踏まえ、子どもたちが学びたいことを深く学ぶことができる学習・探究の場として活用することを主張した研究である。子どもたちの探究的な学習を支え、子どもの問いが深まっていく深い学びを実現するための「学習・情報センター」としての機能と、人間性の伸長に貢献する「読書センター」としての機能に着目する。第3節では学校図書館を活用した先行実践の分析を行い、学校図書館の活用が子どもたちの学びにどのように貢献できるかを明らかにする。第4節では、先行研究をふまえ、カリキュラムの中に学校図書館を位置付け、教科等の学習を深めるための実践的な活動を提案する。

2. 課題意識と背景

現在の学校図書館は、読書活動のための場・本を借りるための場、本が保管してある部屋という認識が強いように感じられる。もちろん、学校図書館には子どもたちの豊かな読書活動を支援する役割もあり、若者の読書離れが進んでいる昨今ではこの役割も大変重要である。しかし、学校図書館には読書のための本以外にも、子どもたちの学習に役立つ資料や学問知識を俯瞰した幅広い情報に触れる機会が多くある。幅広い情報を得られる場としても、協働的な学習の場としても、子どもたちが学びたいことを深く学べる場としても活用できるにもかかわらず、教室での学びや探究と学校図書館が切り離されてしまっている、学校図書館や図書室が学習の場として活用できると認識されていない現状が課題である。

本研究で提案する実践で育てたい子どもは、「自ら学ぶ子ども」である。これは、自ら疑問（問い）や学びたいことを見つけ、情報探索・収集の試行錯誤のプロセスを経て分かったこと、調べたこと、調べたけれどわからなかったことを共有し、他者の意見や探究に触れ、さらなる自分の疑問につなげられる力を持った子ども、教科書での学びからさらに自分が知りたいと思うことを見つけて読み物等を

通して学ぶことができる、また自身の興味関心のある物事について追究したり広げたりすることができる子どものことを指す。

図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（第8回）における主な意見では、学校図書館の役割について、「学びの深化を担う学校の『中心へ』」というキーワードが挙げられた。学校図書館は教育課程の展開に寄与していくための中心的存在となることが求められ、学習指導要領における学校図書館の位置づけが重要であるとの意見が示された。さらに、子どもたちの読書に関する傾向として、読もうとしない子どもが増えている現状と、読もうとしない子どもは学びに向かう力が弱いと考えられるといった問題が提起された。『学習原論』には、以下のような記述があり、図書室の学習室化が提唱されている。

いわゆる教科書学校では図書室はあまり必要を感じられない。したがって図書室はあっても放課時間に利用されるに過ぎない。児童生徒が学習する学校では、図書室は正課時間にも放課時間にも利用される。かつ図書室がなくてはほとんど学習ができないからいたく図書室の必要が感じられる。図書室の必要についてはもはや議論の時代を過ぎている。これをいかにして実施しようかが問題である。図書の利用は疑いもなく二十世紀の学校の使命の一つである。（p.1141.9）

また、小学校学習指導要領総則 第3 教育課程の実施と学習評価には次のような記述があり、学校図書館は読書のためだけの部屋ではなく、児童の日常の学習や生活とつながり、それらを発展させられる学習の場であるべきであると示されている。

学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主體的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。（後略）

学校図書館が子どもたちの深い学びの場・探究活動の場として機能していない背景には、学校図書館の学習・情報センターとしての機能が周知されていない現状や、ICT 機器の発達により、本で調べるよりもインターネットで調べる方が時間がかからなくてよいという考えがあるのではないだろうか。また、探究・調べ学習の場面において、特定の項目についての答えを見つけることがゴールとなっていたり、子どもたちに「調べたい」「知りたい」という意欲がないまま進められていたりする現状も課題である。ただ

テーマについて調べなさい、と指示を出すだけでは子どもたちも何を調べたらいいのか分からず、手が止まってしまうことも多くある。テーマだけでなく、調べ方すらわからない子どももいるかもしれない。このことから、情報探索の基礎を学び、様々な資料に触れて知りたいと思うことに出会ったり、情報を探し出すプロセスを経験したりすることが必要である。そして上記の経験ができる場所は、「学習・情報センター」としての学校図書館であるといえる。

3. 先行実践の分析

(1) 「学習・情報センター」機能の充実に着目した実践

福岡県飯塚市立椋本小学校の実践を取り上げる。文部科学省「これからの学校図書館の整備充実について」、「小学校学習指導要領」に見られる現代社会の要請から、学校図書館には今後より一層、学習・情報センターとして、子どもの自ら学ぶ力の育成を支える役割が求められているという考えに基づき実践された。実践校では、学習・情報センターとしての機能が果たされておらず、館内資料等も未整備であったため活用が少ないという実態があった。この実態を改善すべく、館内環境の整備、資料の収集、学校図書館地要旨同・情報活用に関する指導の学年別年間計画の作成から取り掛かった。令和3年度では、「学習・情報センター機能の向上を図る環境整備・活用推進」「パスファインダー（調べ方の道案内）の活用」の2方途から、学校図書館の学習・情報センターとしての支援を工夫し、子どもたちの情報活用能力・問題解決能力を養うこと、自ら学ぶ子どもの育成を目指した。この実践における「自ら学ぶ子ども」とは、『自分から目的をもって図書館へ足を運び、資料を探しだし、調べ、ひとりで答えを見つけて疑問や問題を解決することも』を指す。

学習・情報センターとしての機能充実・活用促進の面では、子ども・教師の多様なニーズに応えられる資料を媒体問わず幅広く収集・整理・保存し、わかりやすい本棚づくりや動線の確保、学習に役立つ本のリスト、スタンプラリーの作成を行うことで、図書館環境を整えた。また、児童向け・教職員向け図書館だよりの内容の工夫、リクエスト募集やクイズ、本紹介などで来館を働きかける、便利な図書館利用法などの情報を周知するなど、学校図書館を身近な場所にしていくための工夫も行われていた。また、年間計画の作成にあたっては、利用者の多い6月の図書館利用指導に着目し、目次と索引の使い方を学べる図鑑クイズなどを行うイベントを計画する工夫や、日常的に問題や疑問を抱え図書館にやってくる子どもの相談に乗ったり、問題解決の方法を共に考え、必要な資料や情報を提供して支援するレファレンスも積極的に行うようにしたりすることで、児童に図書館利用の意識を根付かせ活用促進を図る、利用する児童に図書館活用や情報活用の技術を学ばせることを可能にした。

私はこの実践の、子ども向け図書館だよりにだけでなく、教職員向け図書館だよりに作成していた点、子どもの利用

状況に基づいた情報活用のイベントを計画していた点を評価したい。学校図書館の学習・情報センターとしての機能が果たしにくい背景には、図書館を活用する利点、子どもたちの学習をどのように支援できるのかが周知されていないことが考えられる。図書館だよりで便利な機能を周知していくことによって活用のハードルを下げ、活用促進につなげることができる。さらに、自由研究などの学習に役立つ本紹介も取り入れることで、子どもたちの学習と図書館を結び付けることができる。また、この実践では、児童の利用が多くなる6月に目次と索引の使い方を学べる図鑑クイズを計画しており、一人でも多くの子どもたちの情報活用能力・問題解決能力の育成に貢献できるよう工夫されていた。児童図書委員会が利用状況を記録している場合もあるので、それらの情報を活かして利用計画を立てることも重要である。学校図書館を身近な学習室にしていくための工夫が、学校図書館の利活用の促進に大きく関係しているとわかった。

パスファインダーの活用の面では、図書館を使った調べ学習が多くなる小学3年生からを対象に、調べ方のコツや資料等を載せたパスファインダーを適宜作成・配布、活用の様子を観察し、利用指導と組み合わせて問題解決できるよう支援を行っていた。パスファインダーを作成する際には、教科書を確認して教師・児童の求める情報を精選し、参考文献の書き方や引用・要約の仕方などの情報も「調べ方のコツ」として掲載し、調べ方を身に付けさせ、自ら学ぶ方法を学べるように項目や流れを工夫した。作成した年間計画を確認し、適時見本を担任教師に配布することで活用の促進も図った。その中で5年生がクラス全員での活用を希望したため、担任教師と相談、連携してパスファインダーを配布し、教室で図書館資料・タブレットを使用しての調べ学習が行われた。パスファインダーを参考に、正しい探し方を学び答えにたどり着くことができていた。この実践を通して、児童に図書館を使いどのように調べたらよいかを学ばせ、求める情報・探す答えにたどり着かせ、自ら問題解決させることができていた。繰り返し活用させる実践では、児童から授業の様子を聞き取り、必要な時期に必要なとされるであろうパスファインダーや資料の提供などの声掛けを実施したり、教員に対して事務室内の司書の机の上に授業で使えそうな本を展示して、学校図書館に足を運べない教師にも興味を持ってもらえるような工夫を行ったりした。さらに、児童図書委員会で『もっとパスファインダーをよくする会議』を開き、児童目線での改善点や活用促進のためのアイデアを集めていた。

この実践から、学習においてパスファインダーを活用することは、子どもたちの情報探索力や情報収集・分析力の育成に貢献できるとわかった。パスファインダーを作成する際には、ただ参考になる文献やインターネットの情報を載せるのではなく、情報を収集する流れに即した順に配置したり、子どもたちが直面するであろう悩みに答えられるようにポイントを整理したりすることが重要である。司書

教諭として作成に携わる際には、調べ方・探し方のコツや参考文献の書き方や、授業者目線で子どもが躓きやすいポイントなどを整理して解消できるアドバイス等を書き入れたりすることで、より学校の実態に即したパスファインダーを作成することができる。また、作成して置いておくだけではもちろん利用されないため、担任教諭や授業者に見本を配布しておく等、調べる際に役立つツールの存在を周知していく必要もある。作成に関して、児童図書委員会で『パスファインダーをもっとよくする会議』を開き、子ども目線の意見を取り入れていた点も評価したい。実際に使用してみた子どもの声を積極的に取り入れていくことで、より子どもたちに合ったパスファインダーを作成することができ、学習の支援を充実させることができる。学習支援が教員のサポートにもつながり、学校図書館やパスファインダー等のツールの利活用は増え、学習・情報センターとしての機能の向上にもつながる。論文内には、「パスファインダーの活用等によって児童の情報活用能力・課題解決力の育成につながった、自ら疑問や課題を解決できるようになった」とあるが、学習の主題に対して疑問を持ってない、何を調べればよいかわからないという子どももいるだろう。「自ら学ぶ子どもを育てる」ためには課題に対して疑問をもち、自分の調べたいことを定めることができるようにするための指導も含めて考えていく必要がある。また、情報探索・活用面以外でのパスファインダーの活用についても検討したい。

(2) 学校図書館活用データベースの実践

東京都調布市立上ノ原小学校、1年生国語科、児童の初めての調べ学習として行った「じどう車くらべ」の実践を取り上げる。この授業では、「調べる」ことをねらいとし、資料では「目次と索引」のある本を中心に揃えた。校内資料にとどまらず、公共図書館からも資料を借り受けることで資料を充実させていた。一人一人が自分で疑問をつくることから始められるように、ドーナツカード（ドーナツチャートのことであり、中央に調べたいテーマ、周辺に「何故だろう」「不思議だな」と思ったことを書き入れることで、大きなテーマから自分のテーマを絞り込むことができるツール）を用いて調べ学習が展開された。これにより、児童は意欲を欠くことなく学習を続けることができ、それぞれが違う課題を解決することが達成感や自信につながった。また、司書は、働く自動車に関するブックトークを行うことで児童の視野を広げたり、本で調べ物をする際の基本として目次と索引の使い方をブックトークとして教えたりする支援を行った。画像を見せて説明したことで、児童の興味関心を惹くことができ、調べる段階では目次と索引を上手く活用できていた。

この実践から、調べ学習の基本を指導すること、インターネットの情報だけでなく、図書資料も活用することのよさを周知すること、子どもが疑問を持てるよう指導を工夫することで、子どもの意欲を欠くことのない学習支援が可

能であると学んだ。学習の最中に適宜、疑問に思ったことや不思議に感じたことを書きこむことができるようにすると、自身の目指す「今の問いを次の問いにつなげる学習」が実現できるのだらうと捉えた。司書によるブックトークが行われていたが、担任教諭が教材研究で見つけた資料等を子どもに紹介するという形でも実現可能ではないかと考えた。その際に、学校図書館が参考になる資料をまとめ、学年のコーナーとして用意しておくことで、より容易に実践できるのではないかと考える。また、この実践は第1学年で行われたものであること、探究活動は総合的な学習の時間だけのものではなく全ての教科に通じていることから、第1学年のうちから調べるための指導・授業ができると、その後の学習にも活かすことができる力を育成できるのではないかと考える。

(3) 読書活動の推進に関する実践

福岡県飯塚市立小中一貫校 穎田小学校の実践を取り上げる。実践校では、読書自体が嫌いな子どもが少ないようである一方、読書傾向の偏りやどのような本を読んでいるかわからないという子どもが多くおり、年々読書への興味関心が低くなっている傾向があった。小学校で読み物や幅広い分野の本に興味を持てなかった子どもは、中学生になっても読書への興味関心が低い、継続して読書に親しむことや読書の定着が難しいという現状もある。これらを踏まえて、子どもたちが幅広く読書に親しみ、読みたい本を自ら探す子どもを育てることを目標に、学校司書によるブックリストを活用した読書支援・図書委員会による読書推進活動の2つの実践を行った。ブックリストの作成では、対象となる小学2、3年生の読書目標・実態に合わせて、楽しく読書が出来、本への興味を持たせることができるような本を、季節や教科単元に合わせて司書が30冊選書した。選書の際の工夫として、学校図書館協議会選定図書、青少年読書感想文コンクールの課題図書、国語の教科書に掲載されている本、できるだけ多くの本を選ぶことができるよう、シリーズのある本を数冊取り入れた。また、図書委員会からおすすめ本を5冊、児童自身が選んだ本（興味を持って読んだ本）を5冊含めて40冊掲載したブックリストを作成した。ブックリストには、署名、著者名、面白さを評価し記入できるようにし、動機付けとしてブックリストの本を読んだ数に応じて、図書委員会で作成したしおり、折り紙、一冊多く借りられるチケットの中から1つを選んでもらえるようにした。図書館内にブックリストに掲載した本の本棚を作ってわかりやすく配置した。さらに、週1回の図書の時間にブックリストの本を読み聞かせたり、本紹介をしたり、内容の途中まで話し、続きが読みたくなるような工夫がされていた。図書委員おすすめの本では、各図書委員が本のPOPを作成して本と一緒に展示した。ブックリストの活用によって、児童が自分に合った本、読みたいと思える本に出会うことができ、読書の幅を広げることができたといえる一方、読書に苦手意識のあ

る児童からは面白くなさそうという意見があり、タイトルを挙げただけでは全ての児童に興味を持たせることができなかつたという結果になった。図書委員会によるおすすめ本紹介とPOPの展示では、その中から興味を持って借りていく児童が多く、ブックリストの本と一緒に探したり、紹介しあつたりする様子も見られ、本と児童、児童同士がつながることで、読書への興味関心を高めることができていた。実践後には図書委員会から参加者を増やすための様々なアイデアが上がり、次の実践に活かしていた。2回目の実践では、分類を意識した選書に変更され、実施期間や取組の周知などを行い、図書委員会による読書活動推進に関しては、本紹介をしているYouTuberをヒントに映像で本紹介を行うよう工夫された。紙媒体だけでなくPDFデータでブックリストを配布することで、家庭との連携も図るようになった。

私はこの実践の、教科書に掲載されている本、図書委員会からのおすすめの本を含めた選書、児童図書委員会のPOPや動画による本の紹介を評価したい。また、本と子どもをつなぐことで、子どもたち同士のつながりも生まれるという部分に大変共感した。子どもたちにとって読書を身近な物にしていくためには、自身の興味関心に基づく選書ができることはもちろん、学習や生活に即した本に触れることができる環境が重要である。また、「読んで欲しい本」だけを集めるのではなく、子ども目線でおすすめできる本を用意することで、より幅広いジャンルの本を読む良ききっかけになる。他者に紹介してもらい、自身が紹介するという活動は、「読書は一人で読む孤独な活動である」というイメージを払拭し、協働的な読書活動の実現にもつながる。そしてこの協働的な活動が、読書の幅を広げたり、興味関心を広げたりと、個人の読書活動を充実させていく。このように、この実践を個別最適な学びと協働的な学びの視点からも分析してみると、協働的な学びの充実が個の学びの充実につながっているということがより明確になる。

実践論文内にもあったように、本のタイトルだけを掲載するのでは不十分な場合もあることから、POPや要約のようなものも同時に掲載できると興味関心を惹きやすくなるのではないかと考えた。また、司書・司書教諭による選書だけでなく、先生方おすすめの本もリストに掲載することで、子どもたち同士だけでなく、本を介して教師ともつながることができるため、学校に関わる全員で学校図書館を作っていくということが実現しやすくなる。学校図書館が協働的な学び・活動の実践の場になることで、子どもたち個々の学びをより充実させることが可能であるといえる。

4. 実践の提案

上記の先行研究と、教科等の学習において学校図書館が活用されていないのではないかと考えられる現状を踏まえ、本研究では新たに、学校図書館を学びの場にし、子どもの深い学びを実現するために、カリキュラムの中に位置づけられる実践を提案したい。カリキュラムとは、学校が

学校教育目標や在籍する児童生徒の実態に応じて柔軟に作っていくものである。カリキュラムの中に学校図書館を位置付けることで、学校図書館にかかる取組は司書教諭や学校司書だけの役割であるという考えをなくし、学校現場に関わる教諭は誰でも教科等の学習で学校図書館を活用できるようにする。

ここでいう深い学びとは、教科書や授業での学びを超えた発展的な学びや、子どもたち自身の興味関心のある世界・事柄についてとことん深めること、資料の活用を通して自ら課題を見つけたり解決したりすることを指す。

(1) 発展学習を実現するための実践の提案

初めに、子どもたちが自分の興味関心についてとことん深めることができる、教科書の学びを超えた学びを実現することができる実践を提案する。例えば、主たる教材である教科書に掲載されている作品と同じ著者の作品を読んだり、歴史等の学習漫画を読んだりすることは、単なる読書活動にとどまらない教科書を超えた学び、つまり発展学習であるといえる。また、教科書を超えた学びの実現は、特別の教科 道徳だけでは学びきれない情操を学ぶことができる、様々な本に触れることで興味関心の幅が広がるなど、子どもたちの人間性の伸長にも大きく貢献することができる。学びを発展させる方向は、各教科の学びを深めるものでも、読書活動でも、子どもの思うままに進んでよい。子どもたちのもっと学びたい・知りたいという思いを尊重し、主体的な探究活動につなげられるように、またその主体的な探究の場として学校図書館が機能できるように提案を行う。

○パスファインダー²の活用

先行実践の中にも、いくつかパスファインダーを活用した実践があったが、ここでは情報探索のための案内としてだけでなく、「各学校ならではの教科・単元パスファインダー」の作成を提案する。「教科書や授業の中で知りたいことが見つかったけれど、どこに行けばよいかわからない、どんな情報にアクセスすればよいかわからない」

「教科書や授業で習ったことに関連したものが読みたい、見たい」という子どもたちのための「道案内」として導入し、子どもたちが学びのために図書室から本を持ってこることができる環境をつくることを目指す。パスファインダーを活用した学習はあくまで発展学習という位置付けであるため、子ども全員に強制するものではない。

パスファインダーには、「タイトル・トピック（単元名）」「キーワード」「概要・基本を知るための資料」「資料一覧（ブックリスト）」「その他有用な雑誌やサイトなどの情報」「作成者のコメント」を記載する。教科書との関連を持たせるために、何年次のどの教科書の何ページなのか、どの教材なのか、どのようなキーワードを深掘りするためなのかをタイトルやキーワードに並べて記載する。

作成にあたっては、長野県図書館協会が作成したマニュアル、並びにワークショップ参加者が作成したパスファインダーの例を参考にすることができる。教科書の内容・年間指導計画に即したパスファインダーにすることで、学習指導要領や教科書と学校図書館をつなげ、カリキュラムの中に学校図書館が位置付き、授業学習の深化・発展に貢献することができる。

例えば、小学2年生国語科「すみれとあり」の単元で教科書パスファインダーを作成するならば、挙げられるキーワードは「あり」「すみれ」「春」である。掲載できる図書資料として、『すみれとあり（矢間芳子・福音館書店）』『ありさんありさんどこいくの（大橋ツヨシ・双葉社）』『はるのずかん（露木和男・岩崎書店）』『小学館の図鑑NEO 植物（小学館）』『小学館の図鑑NEO 花（小学館）』『昆虫世界のサバイバル（洪在徹・朝日新聞出版）』『すみれちゃん シリーズ（石井睦美・偕成社）』等が挙げられる。また、『YAHOO!きっず 図鑑』『いきものずかん（啓林館）』等インターネットの情報を掲載したり、子どもたちが生活科や理科等で学習した内容の成果物として、学校の生き物マップ等を作成してもらい、一緒に掲載したりするのもよいだろう。

教科書パスファインダーは、総合的な学習の時間における調べ学習での活用や、教科横断的な学習の展開も期待できる。上記の例を基に考えると、教科書に掲載されている作品の原本や、同じありを題材にした絵本は国語科であるが、図鑑や科学学習漫画は生活科・理科的な資料であることから、国語科での学びが他教科の学習に繋がるのが期待できる。体育科や図画工作科、家庭科等、一見すると学校図書館との関連性が持たせにくい技術教科においても、パスファインダーを用いて授業の内容を深化・発展させることが可能である。例えば、図画工作科であれば、授業で扱った画法・技法を用いた作品集、画家の伝記、日本の伝統的な画法・技法に関する資料、色彩に関する資料、身近な物で簡単に作れるおもちゃの本、アーティストが主人公の作品などの図書資料や展覧会等の情報を掲載できる。家庭科であれば、調理実習で行った調理法を使った料理の本、裁縫に関する本、暮らしに関する資料、日本・世界の伝統料理・郷土食の本、料理人が登場する作品等の図書資料や、地域の特産品、県内の産地マップなどを載せ、地域学習にもつながる物が用意できる。体育科であれば、各競技の本、オリンピックやワールドカップの資料、速く走れるコツやうまく体を使うコツについて書かれた本やインターネットの動画などを掲載できる。このように、技術教科における深い学び・発展学習とは、授業で学んだものを再度実際にやってみたり、次の学習でも使ってみようと思ったり、自らの生活につなげたりすることであると考える。しかしその壁になるのは「やってみたいけれど何ができるかわからない」「どんなものがあるかわからない」という思いだろう。その際に、パスファインダーを用いて「自分にもできそう」「作ってみたい」「この方法を今度試して

みよう」と思えるものに出会うことができれば、その一歩を踏み出すことができ、深い学びが実現できる。

さらに、単元とパスファインダーを通して図鑑等を見て、自分の気になる物に出会う、新しい興味が広がるなど、子どもの学びたいという思いを育むことや人間性の伸長にもつながる。例示した掲載資料の中にある『すみれちゃん』は、単元に登場するありともすみれとも全く関係のない、名前が同じ女の子が主人公の物語であり、読書活動の方面からの発展に寄与できる。また、生き物マップは、学校図書館の役割の1つである学習成果物の保存の意図と、子どもたちが実際に足を運んで五感で学ぶ機会をつくるという意図がある。成果物だけでなく、近隣の資料館や博物館などの情報をこの部分に掲載する。他にも、足の速い先生や裁縫が得意な先生、絵を描くのが好きな先生等のインタビューや情報も掲載し、資料だけでなく実際に話を聞いてみる機会を作ることできる。このように、単元に関連するものにとらわれず、幅広い本や人、学校内外で学べる場所を掲載することで、より子どもたちの深い学び、興味関心の広がりにも貢献できるパスファインダーにすることができる。

もちろん、作成して学校図書館に保管するだけにしてしまわず、各教室に見本や掲載されている本を置く、授業中に「この単元についてもっと知りたい人はこれを使って下さい、図書室に行ってみて下さい」という声掛けをしてもらうことも重要である。子どもたちそれぞれがタブレット端末からも見られるように、Google classroom や Teams で共有することでより子どもたちの身近な物にすることができ、主体性を引き出すきっかけにもなる。司書教諭や学校司書が中心となって、授業者である先生方の意見や教材研究の様子を反映させながら作成していくことで、よりカリキュラムと一体になった活用の実践が可能になる。

(2) 情報探索の基礎を学ぶ実践の提案

続いて、子どもたちが学習・探究に活かすことができる資料を探し活用したり、知識を得て定着させたりすることができるような実践を提案する。学びを深めるためには、基礎基本となる知識の習得が欠かせない。探究活動においては、様々な情報に触れて精査するための力、分類の棚をざっとみる、百科事典で調べる大テーマについて探索することで、自身が知りたい・探究したいと思うキーワードを見つける力を養うことが重要である。単なる図書館オリエンテーションとしてではなく、情報探索の基礎を学ぶための時間としてカリキュラムに組み込むことを提案する。

①資料探しと図書室のヒミツ（中～高学年）

目標

- ・自分の知りたい情報（資料）を探し出すことができるようになる。
- ・日本十進分類と図書室の本に貼られたラベルの意味と役割について理解する。

活動1, 「学習資料リサーチ選手権」(10~15分)。
教師が次の学習内容やテーマを1つ選び、「今度こんなことをやります、よい資料を探しているから、みんなも探してみてください」と伝え、宿題として子どもたちに資料を探してきてもらう。教師も資料を用意しておく。この際、可能であれば図書室か公共図書館等のものがよい。時間にゆとりがある方が探しやすいので、可能であれば金曜や連休前に行く。探す場所は家、公共図書館、図書室など、どこでもよいことも示しておく。後日、「資料を探してきてくれた人はいますか」と尋ね、探せた子がいた場合はどのように探したかを聞く。いなかった場合には、教師が用意した資料とそれをどのように探したかを示す。また、その資料を教室内に置いておくことで、子どもたちがいつでも知識に触れられる環境をつくる。

活動2, 「図書室のヒミツ探検隊」。(25~30分)

活動1で資料を示したあと、公共図書館や図書室には、資料を探しやすくするヒミツがあることを伝え、それをさがしてきてもらう。本の背表紙に貼られたラベルに書かれている番号(分類番号)について説明する。説明後、「活動1で見つけた本に書かれている番号は何番か」(児童の家庭にあった本であれば)「何番になりそうか」、「活動1で見つけた本と同じ番号にはどんな本があるか、グループで一冊見つける」「自分の好きな本、興味のあることが書かれた本を一冊見つけ、分類番号だけをメモし、グループの友達に伝えて探してもらおう」などのお題を出して「宝探し」を行う。「宝探し」を終えた後、5分程度で活動の振り返りを行う。

活動1, 「資料探し選手権」では、知りたいことだけを大まかに提示された状態で資料を探すのが難しいことを理解させ、資料を探すのに便利なもの(分類)に関心を寄せられるようにする意図がある。また、実地研究等から、子どもたちはゲーム形式にすると意欲的に取り組む様子が見られたことや、先生のお手伝いをしたいと積極的に申し出ている子どもがいたことを踏まえ、競争のような形式にすること、先生のお手伝いをするという設定にすることで、子どもたちの意欲を引きだせるのではないかと考えた。子どもが資料探しをしてこられなかったときに備えて、あらかじめ教師が用意しておくという部分では、学校司書・司書教諭・図書ボランティアがその支援をすることができる。この支援のプロセスを経ることによって、司書等に欲しい資料について尋ねること(レファレンス)についても触れ、子どもたちも学ぶことができる。また資料探しの活動の際に、学校図書館や公共図書館の資料だけでなく、学区内の中学校や高等学校などに協力をお願いし、必要な資料を貸し出していたくことで、小・中・高の連携を図ることもできる。

活動2, 「図書室のヒミツ探検隊」では、ただ分類番号について説明し、聞いただけでは十分に理解できない

ことが考えられる。そのため、学んだことを実際に活用するフェーズである「宝探し」を取り入れる。初めに活動1の最中に個人で見つけた本と同じ番号の本(分類番号の百の位が同じもの)を見つけ、グループで伝え合ったり、グループ内で驚いた、こんな本もあるのかと思った本を1冊選び、全体に共有したりすることで、個の学びと協働的な学びの両方を実現する。また実際に分類番号を活用してみることで、探究活動等で資料を探す必要が出てきた際、この活動を思い出して必要な資料を探す力が身に付くのではないかと考える。

日本十進分類の説明をする際には、①図書館の本には「分類」というものがあり、10個のテーマにグループ分けがされている。②その10のテーマの1つずつが、さらに10のグループに分けられている。ということを説明する。各番号の説明に加え、分類番号の2桁目(十の位)を説明する際には、活動1で選んだ資料の番号を使って説明するとやりやすい。また、学校によっては独自の分類記号を使っている場合があるため、司書教諭や学校司書に確認を取ったうえで、公共図書館等と異なる場合にはその旨も子どもたちに伝えてほしい。

②目指せ! 百科事典&図鑑マスター(全学年)

目標

- ・百科事典・図鑑の仕組みと使い方について理解する
- ・目次や索引を活用し、欲しい情報に素早くアクセスする力を身に付ける

活動: 百科事典の使い方の学習・百科事典クイズを行う。低学年では百科事典では難しいことが考えられるので、図鑑の使い方・図鑑クイズとして扱う。

《百科事典で説明する内容》

- ・百科事典は事柄を言葉、写真、絵、図等を用いて詳しく説明したものである
- ・五十音順、教科別、主題別などがあり、全部を1冊にまとめるととても大きくなってしまいうため、何冊かに分けられている。全部合わせて1つのセットである
- ・(国語辞典の使い方を学習している場合) 国語辞典の「辞」は言葉、百科事典の「事」は事柄を意味しているという違いがある。
- ・百科事典の各部分の名称と役割

「見出し語」: 説明されている事柄を示す言葉。
(例: パンダ、アンパンマン等)

「背」: 本の背表紙のこと。五十音順の場合は調べたい事柄の頭文字が書かれているものを使う。

(例: パンダ → 『ポプラディア』第3版 13)

「つめ」: 背表紙の反対側(ページをめくる側)にある。頭文字ごとに分けられている。

「柱」: ページの上にある。左のページにはそのページの最初に書かれている見出し語の文字、右のページには最後に書かれている見出し語の文字が書か

れている。ここを見るだけで、ページ全部を読まなくとも探したい事柄がこのページにあるかどうか簡単にわかるようになっている。柱はカタカナの言葉であってもひらがなになっていることに注意。

- ・百科事典の調べ方
 - ①「背」や「表紙」を見て調べたい事柄がのっている巻を見つける。
 - ②「つめ」を見て、大まかな位置を決めて本を開く。この時、調べたい事柄の2文字目に注目して位置を決めるとアクセスしやすい。(例：パンダであれば2文字目が「ン」であるため、「パ」のつめの後ろの方を開く)
 - ③「柱」を見て、調べたい「見出し語」と照らし合わせながら探す
- ・調べたい事柄がどの巻のどのページに載っているかをさがすことができる「索引」の巻もある
- ・(国語辞典を学習している場合) 国語辞典と使い方がほとんど変わらないことも説明する。

《図鑑で説明する内容》

- ・図鑑にはいろいろなテーマのものがある。そのテーマに関する情報(説明)を絵や写真と一緒に載せたもの。
- ・「図鑑」と言っても出版社によって異なることもある。複数社の図鑑がある場合には表紙や中身の見比べを行う。
- ・図鑑を使うのに必須な「目次」「索引」の見方・使い方
「目次」：この図鑑には何が書いてあるのかが書かれている。見出し(動物や植物の場合はどんな仲間か等)何ページに何が書かれているかが一目でわかる。
「索引」；自分の知りたい言葉がはっきりしている場合や、目次を見てもわからなかった場合に使うことができる。どの言葉が何ページに出てくるかが、五十音順に書かれている。
- ・図鑑の使い方
 - ①自分が調べたいものが載っている図鑑を「表紙」や「背表紙」を見て探す
 - ②自分の知りたいことが何ページに詳しく書かれているかを「目次」や「索引」を使って探す。
探しても見つからない場合や欲しい情報がなかった場合には、他の図鑑を見る、「目次」等で得た情報(〇〇類、〇〇の仲間等)を使って他の本を探してみる。

以上のことを説明した後、図鑑や百科事典を活用することで答えが見つけれられるクイズを出題する。必要に応じてワークシートやクイズカードを用意する。グループに分かれ、答えを見つけるまでの早さと正確さを競わせる形に

してもよい。またグループの全員が百科事典・図鑑を使うことができるように、あらかじめ回答順を決めておくこと、他のチームが回答し終えていても諦めず、全グループが答えを出すまで次の問題には進まない等のルールを設けることが必要である。クイズの例は全国SLA 学校図書館サポート委員会が作成した『百科事典活用クイズ』やポプラディア社の『百科事典活用のための指導案』『ハテナシート』を参考にすることもできる。また、学級内の児童の興味関心や、現在行っている、もしくは次に行う予定である単元に関連した内容のクイズにすると、授業で得た知識をさらに定着させることに繋がったり、学習の動機付け・導入として活用したりできる。

この活動は、国語辞典の使い方は学んでも百科事典の使い方を学習する機会がないことや、目次と索引の使い方を理解していないまま図鑑などを使っている児童がいる現状を踏まえての提案である。自分の知りたいことがはっきりとしているにも関わらず、情報がどこにあるかわからないために探究の足が止まってしまうのは、非常にもったいないことである。目次と索引の使い方、百科事典の使い方を理解し、使いこなす力を身に付けることで、目的とした欲しい情報に素早くアクセスする力を身に付けるだけでなく、自身の知りたいことに基づいたテーマ設定ができる力や、さらに知りたいことに直面した際に見つけたキーワードを基にして新しい資料・情報の探索につなげることで育める力の育成にも貢献できるのではないかと考える。もちろん、先に述べたなんとなく図鑑を眺めて、気になる・興味を惹かれる事物に出会うことも重要であり、前述した発展学習、人間性の伸長面にもつながっているといえる。

百科事典・図鑑クイズの場面では、子どもたちに意欲的に取り組んでもらうための工夫として、児童の興味関心に基づくクイズにすること、グループ対抗早出し形式にすることを取り入れた。また回答順を決める、口頭で答えを出すのではなく紙に書いて提出してもらいルールを設定することには、百科事典の使い方がメインでありクイズは副次的なものであることを示す、調べきれなかったという児童をなくす意図がある。グループで活動するにあたって、百科事典がグループ分ない学校もあるだろう。その場合には、学区内の小・中・高等学校や公共図書館から期限付きで借りるなどしてなるべく全員が触れられるようにしたい。百科事典・図鑑クイズの作成にあたっては、各学年の先生方や各教科の先生にクイズを考えてもらうこともできる。予習・復習問わず各教科の学習内容に関連する内容を出題してもらうことで、授業と学校図書館のつながりを持たせ、基礎基本の定着を図る。さらに、前年度までにお世話になった先生が大好きな子どもも多いことから、お世話になった/なっている先生方からの挑戦状という形にすることで、子どもたちに「やってみよう」と思ってもらえるのではないだろうか。また、百科事典・図鑑の使い方を学ぶことによって、調べ学習の際に自分のテーマに繋がるキーワードを見つけたり、基本的な情報を得たりす

る力も養うことができる。ただし、楽しいクイズ大会で終わらせてしまうのではなく、再度学校図書館を訪れ、教わったことを基に調べる場面を設ける必要がある。

5. 研究のまとめと今後の展望

学校図書館を学校での学びの中心にしていくためには、第一に学校のカリキュラムの中に学校図書館を位置付けることが必要である。学校図書館の活用にかかる実践は司書教諭や学校司書だけの役割ではなく、学校に携わる全員で取り組んでいくことが重要である。第二に、学校図書館を子どもたちにとって身近な学習の場にする必要がある。本を読むことが好きな子どもも、そうでない子どもも学校図書館へ足を運び、様々な本や資料に触れることできる環境を作っていくことが重要であるということを主張したい。

本研究では、学校図書館を学びの場にし、子どもたちの深い学びを実現するための実践について考察・提案を行った。その中で、子どもたちが授業の中でもっと知りたいと思う内容に出会ったとき、その学ぶ意欲を充足させるには、学校図書館にいきなり、基礎的な知識から関連・発展する知識まで幅広い知に出会えるようにすることが重要であると学んだ。パスファインダーのような「学びの道案内」を用いることで、子どもたちが幅広い知に出会う手助けができ、自らの学びのために図書を持ってきたり、実際に足を運んで五感で学んだりする、深い学びが実現できるのではないかと考えた。教科書を超えた学びだけでなく、人間性の伸長や本を介した新しい世界や人との出会いにもつなげることができる。また、学校図書館を活用した情報探索の場面では、一度調べ方のプロセスやキーワードを見つけた経験をする場面を設けること、本棚をざっと見てみる、百科事典や図鑑等を用いて基礎的な知識を得ることで、自分の知りたいと思えるものに出会う手助けをすることができ、より充実した深い探究が行えるようになる。情報探索の過程で友達の探究に触れたり、欲しい情報が見つからないという壁にぶつかったりする試行錯誤の経験が大切である。

学校図書館を活用し、子どもたちが自分で自分の学習を作っていくプロセスこそが「自ら学ぶ子」を育むことであり、子どもたちが自ら学ぶという学習の展開と深い学びの実現につなげることができる。

一方で、本研究では取組の提案に留まってしまい、実践次元から、子どもたちの様子や声からの考察や検討が不十分であった。今後は、実際に着任した学校で教員向け図書館だよりの刊行等を通して学校図書館の活用に関する周知を行うとともに、本研究で提案した取組を実践していきたい。そして、学校図書館を子どもたちの学びの場にするように、子どもたちの学びたい、もっと知りたいという意

欲を刺激し尊重しながら教科書での学びを超えた学びが実現できるように、情報探索の基礎を学び、自らの疑問や問いを立てながら探究を行うことができるように実践していきたい。

注釈

1 「学校図書館」とは、学校図書館法に規定される、小学校・中学校・高等学校（以下「学校」とする）において、図書、視覚聴覚教育の資料その他学校教育に必要な資料を収集し、整理し、および保存し、これを児童又は生徒及び教員の利用に供することによって、学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童または生徒の健全な教養を育成することを目的として設けられる学校の設備のことを指す。本研究では、「図書室」と呼ばれている設備も含めて「学校図書館」として考える。

2 パスファインダーとは、利用者が特定の主題に関する情報収集を行う際の最初の取り掛かりであり、図書館資料もしくは図書館から提供される各種情報資源のガイド・要チェックリストのことで、探索行動中に生じる典型的な要求にこたえるもの（鹿島2016）で、公共図書館等にある情報探索のための道案内である。

主な引用・参考文献

- ・文部科学省、『【参考資料】図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（第8回）における主な意見』2025/12/18（最終閲覧 2026/1/18）
- ・木下 竹次、『学習原論』明治図書 p.114, l.9-13 1972
- ・文部科学省、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』2017
- ・吉住 歩、『自ら学ぶ子どもを育てるための学校図書館教育～学習・情報センターの機能充実・活用促進と教科学習におけるパスファインダー活用を通して～』（ふくおか教育論文）2022
- ・林田 恵、『幅広く読書に親しみ、読みたい本を自ら探す子どもを育てる学校図書館教育～ブックリストを活用し、本をつなぐ読書活動を通して～（ふくおか教育論文）2022
- ・東京学芸大学 学校図書館運営専門委員会, 関 雅美, 『授業に役立つ学校図書館活用データベース：事例検索 じどう車くらべ』2014（最終閲覧：2026/1/25）
- ・赤木 かん子・塩屋 京子, 『しらべる力をそだてる授業！』ポプラ社 2007 p.18-27, p.28-39, p.72-79
- ・鹿島みづき, 『パスファインダー作成法 -主題アクセスツールの理念と応用-』樹村房 2016 p.10, l.3-6
- ・長野県図書館協会, 『授業に役立つパスファインダー 学校図書館・調べ方案内（探求ナビ）』（最終閲覧：2026/01/18）
- ・全国学校図書館協議会, 『〈資料・情報活用の支援・指導NO.5 百科事典の使い方〉』2021/4/1（最終閲覧：2026/01/18）
- ・全国SLA学校図書館サポート委員会, 『百科事典活用クイズ』2021/4/1（最終閲覧：2026/01/18）